脅威は続く、科学は途上　京都大学特別教授・本庶佑氏

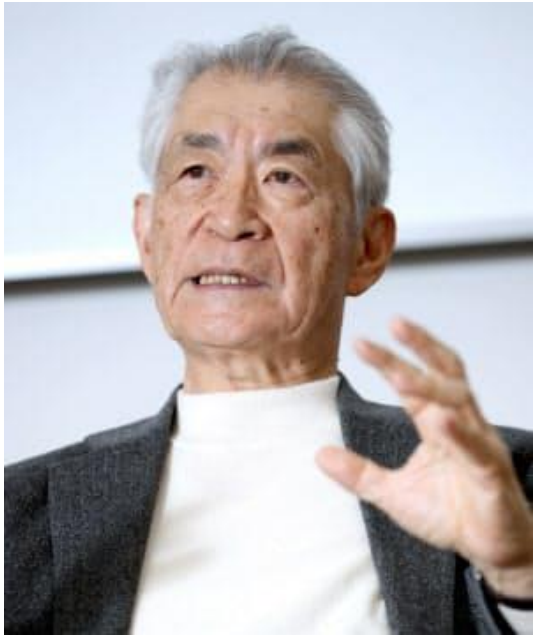
コロナと世界（2）

2020/4/10 5:05 更新

――新型コロナウイルスの災禍をどうみますか。

「今は緊急事態、非常事態で最大の国難だ。多くの人命が失われ、世界中の経済が大打撃を受けている。重大なのはどれだけ傷を浅くするか。ぬかるみにはまったようなものだから、いかにして脱出するか。そのために何ができるか知恵を絞る。どの国がいち早く抜け出せられるかの競争になる。そのためにウイルス感染をコントロールする。感染者の急増と、それに伴う医療崩壊は絶対に避けたい」

「人々がパニックになるのは死ぬからだ。死亡者を少なくするには治療薬がいる。中国からの研究報告を生かす。推奨している薬はどんどん使う。超法規的に保険適用、あるいは準ずる措置を政府がとるべきだ」



本庶佑・京都大学特別教授

――感染症の脅威から人類はなぜ逃れられないのですか。

「医学は 20 年前に比べても格段に進歩したが新しいウイルスがでてきたら新しい手立てが要る。物理・化学は論理的で全体の形が確立しているが生命科学はわからないことが多すぎる未熟な学問だ。たった 1 つの変わったウイルスが出てきて世界がひっくり返るようになる。なんでだと考える人はたくさんいるだろうが、これが現実だ」

「感染症とがんとはまったく違う。感染症は伝搬してあっという間に患者が増える。一方、がんは発症率はほとんど変わらない。治癒率もほぼ同じ。安定した医学的知見が積み重なっている」

「免疫学と一体的で感染症研究を進めなければならない。ウイルスだけをみていても意味がなく戦う人間がどう反応するかを探る必要がある」

――コロナ後の世界はどうなるのでしょう。

「新型コロナの大流行が起こったからといって人の動きを永遠に止めることはできない。グローバル化の流れが逆流するとはみていない」

「中国の動向が大きい。中国発の病気だが、一番早く経済復興にたどりつくに違いない。中国の力がさらに強くなるのか、逆に世界中から冷たくあしらわれるのか。予想できないが、中国の立ち位置、各国の中国を見る目が影響を受けるだろうし、国際秩序が変わる可能性はある」

――日本の課題は何ですか。

「感染症対策は一種の戦争のようなところがある。いざというときには社会システムをコントロールして、かなり強い権限をもって対応する。専門家が平時から政策提言し、行政が実行に移していかなければならないが、日本はそうなっていない。米疾病対策センター（CDC）のように常に目を光らせて、研究と行政との接点みたいなことをやる。医学における自衛隊のような仕組みがないのはよくない」

「IT 戦略の遅れ、いかに社会実装されていないかがあらわになった。台湾の取り組みはとても参考になる。マイナンバーが一つのカードで個人の医療情報もわかるようになっている。教育だってオンラインの方が先生と生徒の 1 対 1 感が強まる。40 人の教室で孤独感を味わわずにすむ。どんどんやったらいい」

（聞き手は編集委員　矢野寿彦）

◇

ほんじょ・たすく　分子生物学者で 2018 年、「免疫抑制の阻害によるがん療法の発見」でノーベル賞を受賞した。新型コロナ対策で検査の大幅な拡充などを提言している。